

## ボーダーレス社会の狭間はざまにいる私

日本外国語専門学校 ボビエル・トレーシー・レイン（フィリピン）

私は日本で日本語を学んでいるフィリピン人だ。しかし、留学生ではない。そう説明すると周りの人は首をかしげる。日本で学んでいる外国人は「留学生」であり、自分の意思で日本という国を選んで国境を越えてきた人であるという固定観念に私はいつも違和感を覚えてきた。なぜなら私は望まざる越境者だったからだ。

私は15歳の時に来日した。それまではフィリピンで祖父母と暮らしていた。その頃、姉と兄、母は日本で暮らしていて、私は夏休みに家族を訪ねるつもりで日本へ来た。夏が終われば、またフィリピンに帰って元の生活に戻るものだと思っていた。しかし、日本に着くなり母は「夏休みが終わったら日本の中学校に通うのよ」と私に告げた。私は母からの突然の宣告を心から拒否したかったが、15歳の私にはフィリピンに戻るといふ選択肢はなかった。中学では言葉も授業もわからず、孤立した。家に帰ると泣いてばかりいた。話し掛けてくれるクラスメイトもいたし、先生も親切だった。それが余計につらく、自分でボーダーをつくって、その中に誰も入ってこないことを願った。ボーダーを外してしまったら、みんなと同じように振る舞い、グループの中に溶け込まなければならぬ。そのためには、多くの壁を乗り越えなければならなかったが、それができる自信はなかった。「フィリピンに帰る日まで」と自分に言い聞かせて孤独に耐えた。しかし、しばらくたって、フィリピンには帰れないことに気

付いた。日本で生きていくしかない。そう思った時、自分が守ってきたボーダーを取り払う覚悟を決めた。それから、少しずつ日本語も上達し、友達もできた。常に友達のしぐさや話し方を観察し、同じように振る舞う努力をした。友達と談笑する様子を見て、きっと学校の先生も安心したことだろう。ところが、私の中では新たな違和感が生まれていた。「みんなと違う私」でいることに孤独を感じ、「みんなと同じ私」になることができたはずなのに、なぜか納得できなかった。今、考えてみると私がボーダーを越えてクラスメイトがいる世界に移動しただけで、そこには変わらずボーダーが存在していた。そして「みんなと違う私」を必死に消し、同調することで新しい世界の住人になれたとしても、自分が満たされないことを知った。

私は今、私と似たような背景を持つ人が集まるクラスで日本語を学んでいる。小学校の時、日本にきた人、外国籍の親を持つ日本国籍の人などさまざまだ。今までに比べたらクラスの雰囲気にも多様性を感じる。元々、みんな違うのだから同調する必要はない。ボーダーレスクラスと言えるかもしれない。しかし、私はそんなクラスの中でも、相変わらず何かのボーダーに引掛かる。月曜日の授業は決まって週末をどう過ごしたかという質問で始まる。みんなは家族と旅行に行った、友達と買い物に行ったなどと楽しそうに話す。私だけが「アルバイト」と答える。わが家は母子家庭で経済的に余裕がない。学費は自分で稼ぐ。友達からの誘いも、お金がないので断っている。私がいらないところで友達が楽しんでる写真をSNSで見ると、孤独を感じる。それで、SNSを見るのをやめた。

ボーダーは国や言語以外にも経済、家庭環境、至る所に存在している。全員が違うことは、前向きに「多様性」として捉えられる。しかし、自分だけが違うとき、それは「ボーダー」に感じられる。ボーダーレスな世界は多様な人と交じり合い、自分の世界が広がるが、結果的に自分と比べる対象が増えることで新たなボーダーの存在に気付かされることになる。SDGsでは「誰一人取り残さない世界」

を実現するという目標を掲げ、今や世界が「ボーダーレスな社会」に向かって進んでいる。しかし、人々が自由に行き来し、さまざまな生き方を選べる社会の裏側で苦しんでいる人たちもいるのではないか。全ての人が「自由に」選択できるなら、ボーダーレスである社会は美しい。しかし、大人の自由な選択によって子どもの自由が奪われるようなことがあってはいけない。ボーダーレス社会をつくる上で、同時に何かが犠牲になっているのではないかという目を持ち続けなければならない。私は、自由に選んでできる社会をただ提唱していくのではなく、自由に選んでいけない人たちや、あえて自分の世界にこもりたいたいという人たちが自分の未来に期待できる社会であればよいと思う。私がボーダーレス社会の光と影に気付けたのは、フィリピンを出て日本でさまざまな人と出会い、毎日、右往左往しながらも学び続けることができたからだ。学び、考えることで見える世界が広がる。世界が広がれば、私の居場所もどこかに見つかるはずだ。「誰一人取り残さない世界」、本当のボーダーレス社会を実現するために、私はこれからも壁にぶつかりながら不器用に前に進もうと思う。

